

基本動詞「とぶ」の多義構造

— 比喻による意味拡張の観点から —

石井 佐智子

要 約

これまで多義語の意味は羅列して記述されることが多く、学習者にとって、その意味は煩雑で習得しにくいものと言われてきた(今井 1993, Kellerman1979, Tanaka & Abe1984 など)。こうした課題を受けて、近年は意味同士の関係を示し、体系的に意味記述を行うことが求められている(松田 2006, 武藤 2001, 森山 2002, Langacker1986, Lee2001 など)。本研究では森山・荒川・今井(2009)の枠組みを用いて、基本動詞「とぶ」を分析すると共に、多義構造を示した。

本 文

1. 研究背景・目的

「同一の音形に意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結びついている語」(国広 1982:97)、多義語は多数存在する。しかし、多義語の意味が言語間で完全に対応することは極めて稀である。例えば日本語「とぶ」と英語「fly」は「鳥が空をとぶ」「A bird flies in the sky」では対応するが、「指示がとぶ」「話がとぶ」「とんだファッション」では「fly」と対応しない。ここから、日本語「とぶ」の意味は「fly」とは体系的に異なることがわかり、言語によって意味の派生が様々であることも想像できる(武藤 2001)。

以上のような問題もあり、外国語学習者にとって多義語の意味は煩雑で、習得しにくいと言われていた(今井 1993, Kellerman1979, Tanaka & Abe1984 など)。こうした指摘があるにもかかわらず、日本語教育の現場では学習者が日本語母語話者用の国語辞典を使用しながら多義語の意味を調べ、意味を丸暗記するといった学習方法をとるのが現状である。国語辞典の意味記述は意味の羅列に留まっており、意味の丸暗記は学習者に負担のかかる手段という指摘もあり(松田 2006)、多義語をめぐる課題が残されている。

こうした課題を受けて、多義語を体系的に捉える試みが認知言語学分野を中心に盛んに行われている(国広 1997, 松田 2006, 武藤 2001, 森山 2002, 森山・荒川・今井 2009, Langacker1986, Lee2001 など)。一連の研究ではそれぞれ対象語の意味分析を行っているが、その中でも森山・荒川・今井(2009)は(1)日本語学習者用に(2)意味同士の関係(意味構造)を示した辞書の編纂を目指し、研究を進めている。本稿では森山・荒川・今井が編纂する辞書の中で、自身が担当する「とぶ」を分析する。そして、その意味構造を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 『大辞林』の意味記述

「とぶ」は「飛ぶ・跳ぶ」が同源として『大辞林第三版』(以下、『大辞林』とする)『広辞苑 第六版』

『日本国語大辞典 第二版』に掲載されている。「飛ぶ・跳ぶ」を合わせた「とぶ」の意味は『大辞林』では以下のように14にまとめられている。

- <1> 空中に浮かんで移動する。
 - ①鳥が空を飛ぶ ②風で花粉が飛ぶ
 - <2> 空中を勢いよく動く。空を切って行く。
 - ①ボールが飛ぶ ②弾丸が飛んでくる
 - <3> はねて散る。
 - ①しぶきが飛ぶ ②花火が飛ぶ
 - <4> ある場所へ飛行機に乗って行く。
 - ①あすはソウルに飛ぶ
 - <5> ある場所へ大急ぎで行く。急行する。
 - ①知らせをくれればいつでも飛んで行くよ
 - ②地震発生後すぐに現地に飛んだ
 - ③ベンチから伝令が飛ぶ
 - <6> 遠くへ逃げる。高飛びする。
 - ①犯人は香港へ飛んだ
 - <7> あいだが抜けて先へ進む。また、次に移る。
 - ①この本は16ページ飛んでいる
 - ②話があっちこっち飛ぶ
 - <8> 不意に打撃が加えられる。
 - ①いきなりげんこつが飛んで来た
 - <9> 大声で言葉が発せられる
 - ①怒声が飛ぶ ②野次が飛ぶ
 - <10> 指令が伝えられる。また、うわさ・デマなどが世間に広まる。
 - ①スト解除の指令が飛んだ
 - ②怪情報が乱れ飛んでいる
 - <11> つながっていたものが急に離れる。切れる。
 - ①ヒューズが飛んだ ②首が飛ぶ(=免職になる)
 - <12> 消えてなくなる。
 - ①アルコール分が飛ぶ
 - <13> 常識からかけ離れている。
 - ①人や動物を足で地面をけて空中に跳ね上がる。跳躍する。また、そうして物の上を越える。
 - ①バットがぴょんと跳ぶ
 - ②2メートルのバーを跳ぶ ③向こう岸へ跳ぶ
- 国語辞典は意味を詳細に分類し、記述しているも

の、やはり意味の羅列という印象は拭えず、それぞれの意味同士の関係性もわからない。こうした点からも、「とぶ」の意味関係を考慮した意味記述が求められていると考える。

2.2 国広(1997)の意味記述

2.2.1 理論的枠組、及び分析

認知言語学が多義語を扱う場合、3つの立場¹がある(田中1990)。その中で国広(1997)は多義すべてに共通する1つの意味によって多義語を1つの図式で捉え、包括的に意味を説明するという立場をとっている。国広(1997)はこの図式を現象素²と呼び、この現象素を色々な角度から捉えたり、焦点を絞ったりすることで多義を捉えるとしている。国広(1997)の「とぶ」の現象素は図1のとおりである。

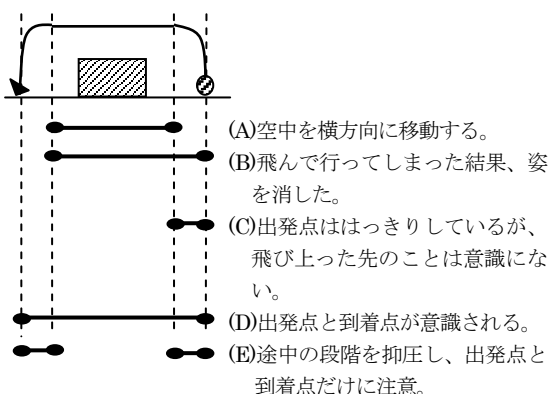


図1 「とぶ」の現象素(国広1997:241)

「とぶ」の現象素は「あるものが空中に飛び上がり、空中を水平に移動し再び地上に降りる筋道」である。そして、図1の四角は溝などの障害物を表している。図1の(A)から(E)の黒丸で結ばれた線は現象素の中で焦点が絞られる部分であり、その部分に焦点を絞ること(認知操作)によって多義が認められる。国広(1997)は『大辞泉 初版』にある用例を(A)から(E)に再分類し、以下のように挙げている。

- (A) ①鳥が飛ぶ ②木の葉が飛ぶ ③つぶてが飛ぶ
 ④事故現場へ飛ぶ ⑤心は故国へ飛ぶ
 ⑥犯人は海外へ飛ぶ ⑦びんたが飛ぶ
 ⑧声が飛ぶ ⑨デマが飛ぶ
 (B) ①染めが飛ぶ
 ②ローンの返済でボーナスの半分が飛ぶ
 ③ヒューズが飛ぶ ④地震計の針が飛ぶ
 (C) ①花火が飛ぶ ②しぶきが飛ぶ
 (D) ①外相がワシントンへ飛ぶ
 ②ジャンプ競技でK点まで跳ぶ
 ③溝を跳ぶ ④飛び箱を跳ぶ
 (E) ①ページが飛ぶ ②縫い目が飛ぶ

2.2.2 検討

国広(1997)は「とぶ」を包括的に説明し、新たな意味記述の可能性を示している。しかし、「とぶ」の認知操作と用例には数点の疑問が残る。

まず「(A)⑥犯人は海外へ飛んだ」「(D)①外相がワシントンへ飛んだ」における認知操作についてである。「(D)出発点と到着点が意識される」とあるが、(A)⑥でも「出発点=現在の位置、到着点=海外」と捉えることができる。(A)⑥と(D)①の用例の相違を(A)(D)による認知操作では十分には説明しきれないように思われる。

次に(D)の認知操作と用例の関係性についてである。現象素と照らし合わせると、(D)は「出発点から障害物を越えて到着点へ」と読み取れる。そして、「(D)①外相がワシントンへ飛ぶ」「(D)③溝を跳ぶ」「(D)④飛び箱を跳ぶ」では確かに「障害物(=海、溝、飛び箱)を越えて」と捉えることができる。しかし、「(D)②ジャンプ競技でK点まで跳ぶ」では「ジャンプ台(=出発点)から具体的な障害物を越えて」とは言い難い。

この他に現象素の「空中移動」についても疑問が残る。「(A)④事故現場へ飛ぶ」は飛行機などで「(A)空中を横方向に移動する」とは限らず、バスやタクシーなどで地上を「急いで移動する」場合も考えられる。また、「(B)②ボーナスの半分が飛ぶ」をはじめとする(B)の用例も実際に「(B)空中を飛んで行った結果、姿を消した」わけではない。

以上のように認知操作と用例が結びつかない場合と現象素が用例を十分できない場合が見られた。これには現象素の理論的背景があると考えられる。田中(1990)によると、現象素はすべての多義を包括する最大公約数的なものであり、大変抽象度が高いものである³。このように、抽象的な現象素をあらゆる角度から捉え直すのは高度な認知能力を要する行為であり、見る者によって焦点の絞り方が異なる可能性がある。そのため、中には国広(1997)の示す認知操作が私たちのものとは一致しない場合もあると考える。国広(1997)の分析は画期的なものであるが、「とぶ」を1つの図式で捉えることは難しいと思われる。

3. 研究方法

3.1 理論的枠組

森山・荒川・今井(2009)は各意味の關係に重点を置き、ネットワーク・モデルに基づいて、多義語の学習辞典の編纂を進めている。ネットワーク・モデルは、語の意味を複数の節点からなるネットワークとして捉えるため、プロトタイプやスーパースキーマを抽出できない場合でも有効である(松本2003)。ネットワーク・モデルはプロトタイプ理論とスキーマを統合した理論であり(松本2003)、多義語の分析によく用いられている(森山2002, Langacker1986, Lee2001など)。なお、プロトタイプ理論はプロトタイプ⁴から意味が拡張するというものであり、スキーマ⁵は元の意味と拡張された意味との間の共通性を意味する(松本2003, Langacker1986)。

プロトタイプの認定については複数の立場があるが、森山・荒川・今井(2009)ではコーパス⁶から頻度

を見るとともに、多義構造を説明する上での整合性から決定している。本稿でもそれに従うこととする。また、意味拡張の動機づけについても森山らに従い、比喩の観点から行う。比喩を用いるのは、比喩を用いるとスキーマによる意味拡張も説明可能であると指摘されているためである(靱山 2001)。

3.2 比喩

靱山(2001)、瀬戸内(1997, 2001)は比喩としてメタファー(隠喩)、シネクドキ(提喩)、メトニミー(換喩)を挙げている。以下、瀬戸(1995)の定義を示す。

瀬戸(1995)はメタファーを類似性に基づくもので、より抽象的で分かりにくい対象をより具体的で分かりやすい対象に見立てることであると定義している。「分数の計算でつまずく」は「石につまずく」と障害物(=分数の計算)に阻まれて先に進めないという類似性からの見立てた例である。

シネクドキは「意味世界における包含関係に基づく意味変化」である。「飲む、打つ、買う」の「飲む」は「酒を飲む」というより限定された意味を表すシネクドキの例である。

メトニミーは「現実世界のなかでの隣接関係に基づく意味変化」である。瀬戸(2001)はメトニミーを詳細に分類しているが、ここでは本稿と関わる時間的な隣接性に基づく時間的メトニミーを挙げる。

瀬戸(2001)によると、時間的なメトニミーには「全体で部分」、「部分で全体」を表す2種類がある。前者の例には smoke「喫煙する(全体)」に対する「吸い込む(部分)」がある。「喫煙する」は煙を吸ったり吐いたりする行為で、図2のように始まり(P1)、展開(P2)、終わり(P3)をもつ時間的に展開した全体的な行為(W)を表す。この中で時間的な部分(Pにあたる)に注目すると、「吸い込む」を表すという。

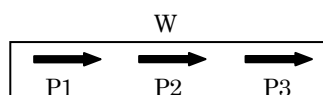


図2 全体で部分(瀬戸 2001:120)

後者の例には breathe「息を吸う(部分)」に対する「生きる(全体)」がある。「生きる」という行為がプロセス(=部分)として時間と共に進行して、その結果、「生きる」という全体的な行為を表すという。

3.3 意味記述にあたって

本稿では意味の配列や用例なども森山・荒川・今井(2009)の記述にならって行う。

プロトタイプは意味1とし、意味1から拡張した意味をそれぞれ意味2、意味3、意味4のように表記する。そして、意味1からではなく、例えば意味2から意味拡張した場合は意味2a、意味2bのように表記し、意味2aから拡張した場合は意味2bのようにアルファベットを用いて表す。

意味2以降の配列は意味1から意味が近い順に並べる。具体的にはメトニミーを前に、メタファーを

後ろに、シネクドキは随時配列する。メトニミーを前に配列するのはメトニミーが「現実世界のなかでの隣接関係」にあるため、派生する前の意味を引き継ぎ、その部分や全体を表しているからである。これに対して、メタファーは「見立て」であるため、派生する前の意味とは領域が異なっている。

また、意味を説明する際に用いる用例は『大辞林』やコーパス⁸、検索エンジン Google にあったものを使用する。

4. 分析

意味1: 元の場所を離れて空中を移動する

意味1は(1)のように内在する力で空中を移動する場合も、(2)のように風などのような外からの力で空中を移動する場合もある。また、移動方向は水平(国広 1997)に限らず、あちこちでも構わない。

- (1)鳥が空を飛ぶ (2)風で花粉が飛ぶ

意味2: 空中を移動して遠くへ行く

意味2は意味1がプロセスとして時間と共に進行し、その結果「遠くへ行く」ことを表す。時間的な部分(=空中を移動する)が全体(=遠くへ行く)を表し、意味1からのメトニミーによる意味拡張である。意味2は「へ/に/まで」のような到着点を表す格助詞と共に起る。

- (3)あすはソウルに飛ぶ

- (4)ボールが場外まで飛んだ

意味2a: 逃亡する

意味2aは意味2がより限定されたシネクドキによる意味拡張である。遠くへ行く目的は様々あるが、意味2aは特に「罪を犯したため遠くへ行く=逃亡する」ことを意味する。

- (5)犯人は香港へ飛んだ (6)犯人は海外へ飛ぶ

意味2b: ある場所に急ぐ

意味2bはどこかへ逃げるように、ある場所に急ぐことを表す。

- (7)知らせをくれればいつでも飛んで行くよ

- (8)地震発生後、すぐに現地に飛んだ

意味2bは実際に空中を移動するとは限らず、走ったり車に乗ったりして、地上を速く移動することも表す。意味2aとは「短時間で着くように移動する」という類似性が読み取れる。ここから、意味2bは意味2aからのメタファーによる意味拡張と考える。

意味3: 勢いよく元の場所を離れて空中に発せられる

意味3は意味1の中から「元の場所を離れて空中に発せられる」部分を表しており、意味1からのメトニミーによる意味拡張であると考えられる。

- (9)しぶきが飛ぶ (10)唾が飛ぶ

- (11)ソースが飛ぶ

意味3は「に」など到着点を表す格助詞といつも共起するわけではないことから、「移動して到達」ではなく、「発せられる」意だと考える。また、意味3では噴水や口、皿にあるべきものが勢いで空中に発せられる。

意味 3a：勢いよく口や手から働きかけが発せられる

意味 3a は不安や不満といった負の感情により生じたものが躊躇なく、口から声として、もしくは手から攻撃として勢いよく発せられることを表す。

- (12)ベンチから伝令が飛ぶ
 (13)いきなりげんこつが飛んで来た
 (14)野次が飛ぶ (15)怒声が飛ぶ
 (16)スト解除の指令が飛んだ
 (17)デマが飛ぶ

意味 3a は意味 3 (唾、ソース) のように、実際に「元の場所を離れて空中に発せられる」わけではない。

「勢いよく発せられる」という類似性に基づく、意味 3 からのメタファーによる意味拡張である。意味 3a に関連して「怪情報が乱れ飛ぶ」という用例があるが、これは「怪情報があちこちに向かって発せられる＝広がる」という意味である。この「広がる」という意味は前項動詞「乱れ」により「あちこち」という意味が付与していると思われる。意味 3a の「とぶ」はあくまで「発せられる」を表すと考える。

意味 4：人や動物が脚力でジャンプする

意味 4 は意味 1 の時間的な部分である「地を離れて空中に一瞬存在する＝ジャンプする」ことを表す。

- (18)バツがぴょんと跳ぶ
 (19)跳んで喜ぶ

意味 4 は全体 (= 空中を移動する) の部分 (= ジャンプする) という時間的に隣接関係にあり、意味 1 からのメトニミーによる意味拡張である。意味 4 は「空中に移動する前の部分」をあらわす点では意味 3 と同様であるが、脚力で空中に向かう点で異なる。人や動物の足を使うことから、意味 4 では「跳」の漢字を用いる。

意味 4a：ジャンプで空中を移動して到着点へ行く

意味 4a は意味 4 がプロセス (= 部分) として時間と共に進行して、その結果「到着点へ行く」ことを表す。時間的な部分 (= ジャンプする) により全体 (= 到着点へ行く) を表していることから、時間的な隣接関係にあり、メトニミーに基づく意味 4 からの意味拡張であると考えられる。

- (20)向こう岸へ跳ぶ
 (21)2メートルのバーを跳ぶ

意味 4a は(20)のように距離的に離れた到着点へ行く場合に限らず、(21)のように距離としては目の前だが、高さを経て到着点へ行く場合も含む。意味 4a には「ジャンプ競技で K 点まで跳ぶ」のように具体的な障害物が存在しない場合も考えられる。意味 4a は到着点までジャンプで空中を移動し、途中どこにも着地せずして到着点へ行くことに主眼が置かれる。

意味 4b：順番を抜かして進む

意味 4b はジャンプして到着点へ移動するように、順番を抜かして進むことを表す。

- (22)この本は 16 ページ飛んでいる
 (23)話があっちこっち飛ぶ
 (24) (CD の) 音が飛ぶ

意味 4a が「空中を移動して (= 途中どこにも着地しないで) 到着点へ行く」という意味であるのに対し、意味 4b は「次の順番にあるものを経過しないで、次の次以降へ行く」という意味である。両者には「直後にあるものを経過しないで先へ行く」という類似性が窺われる。ここから意味 4b は意味 4a からのメタファーによる意味拡張であると考えられる。

意味 5：成分が気化する

意味 5 は成分が鍋などを離れて空中を移動するようになくなる (蒸発する) ことを表す。

- (25)アルコール分が飛ぶ
 (26)水分が飛ぶ

意味 5 は成分が実際に空中を移動するわけではないが、成分が気体になることを意味している。気体は空中にあるものであるため、意味 1 とは「元の場所を離れて空中へ」という類似性が窺われる。この点から、意味 5 は意味 1 からのメタファーによる意味拡張であると考えられる。

意味 5a：トラブルでなくなる

意味 5a はトラブルでなくなることを表す。意味 5 はアルコールなどの成分が鍋などから「気化により元の場所を離れて空中を移動するようになくなる」という全体プロセスを表しているが、意味 5a はその時間的な部分である「なくなる」を表している。

- (27)ヒューズが飛んだ
 (28)首が飛ぶ (= 免職になる)
 (29)データが飛ぶ (30)記憶が飛ぶ
 (31)ボーナスが飛んで行った

用例にあるヒューズはヒューズそのものを指しているのではなく、内在している電気を通す機能を比喩的に表している。また、首も同様に社員として働く資格を比喩的に表すものである。用例からなくなるのはパソコンの中のデータ、頭の中の記憶、財布や銀行口座の中にあるボーナス (お金)、のように何かの中に収められているものが多いように思われる。そして、なくなる原因は電気の使い過ぎや仕事上のミスなどトラブルである場合が多いと考えられる。

意味 6：常識から離れる

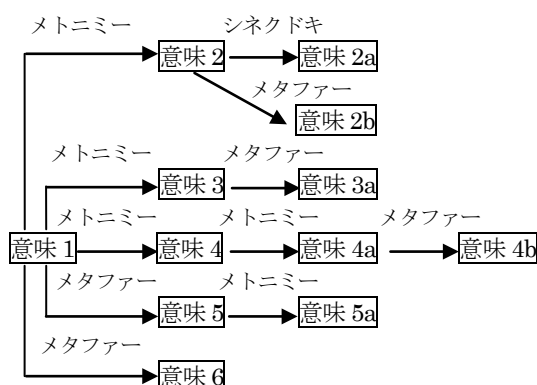
意味 6 は常識から離れるという意味である。

- (32)飛んだファッション
 (33)考え方が飛んでいる

日本語には「地に足が着かない」という「しっかりしていない、常識に沿って行動できない」という表現がある。「地に足が着かない状態」とは空中にいる、つまり「飛んでいる状態」である。意味 6 と意味 1 には「空中にある」という類似性があり、意味 6 はメタファーによる意味拡張であると考えられる。

5. まとめ

以上の分析をまとめ、「とぶ」の多義構造を以下に示す。



6. 今後の課題

本研究は認知言語学の理論に基づいた分析であるため、日本語母語話者から見た多義構造の妥当性は明らかではない。アンケート調査などを行うことで多義構造の妥当性を求めるとともに、新たな分析を加える必要がある。また、日本語教育を考慮するならば、「浮く」などといった隣接語との差異化を取り入れたり (Takahashi & Tanaka1992)、非母語話者にも調査を行ったりする必要もある。これらは今後の課題としたい。

注

1. 田中(1990)はプロトタイプ理論、スーパースキーマ、ネットワーク・モデルを挙げている。
2. 田中(1990)や松本(2003)をはじめ、認知言語学では広く多義すべてに共通する1つの意味をスーパースキーマと呼んでいるが、国広(1997)はこれを現象素と呼んでいる。尚、現象素は厳密にはスーパースキーマと異なる概念とされる。
3. 松本(2003)は語によっては抽出できない場合もあると述べている。
4. ネットワーク・モデルにおけるプロトタイプは意味全体におけるプロトタイプに限らず、拡張された意味の元の意味(部分的プロトタイプ)を表すこともある(松本2003)。
5. 「ring」の「指につける輪状の装飾品」と「鼻につける輪状の装飾品」には「輪状の装飾品」という共通性、スキーマが存在する。
6. コーパスは Sketch Engine を使用している。
7. メタファーには「空間(友達が来た)」から「時間(春が来た)」のような異なる領域への意味拡張が存在する(松本2003)。また、「足を洗う」のような慣用表現もメタファーにより成立しており、メタファーには字義通りの意味を表さない場合もある。
8. 例文の抽出も Sketch Engine を使用した。

参考文献

- 今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41, 243-253.
- 国広哲弥(1982)『意味論について』大修館書店
- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店
- 瀬戸賢一(1995)『メタファー思考』講談社
- 瀬戸賢一(1997)「ことばの経済—メトニミーとシネクドキの観点から—」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』49-7, 37-50.
- 瀬戸賢一(2001)「語彙的メトニミーのパタン」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』53-5, 105-116
- 田中茂範(1990)『認知意味論 英語動詞の多義構造』三友社出版
- 松本曜(2003)『認知意味論』大修館書店
- 松田文子(2006)「コア図式を用いた多義動詞『とる』の認知意味論的説明」『日本語科学』19, 119-132.
- 武藤彩加(2001)「味覚形容詞『甘い』と『辛い』の多義構造」『日本語教育』110, 42-51.
- 初山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」『認知言語学論考 No.1』ひつじ書房 29-58.
- 森山新(2002)「認知的観点から見た格助詞『の』の意味構造」『日本語教育』115, 1-10.
- 森山新・荒川洋平・今井新悟(2009)「認知言語学的観点からの日本語学習辞典を考える」日本語教育学世界大会(シドニー)ポスター発表
- Langacker, R. (1986) An Introduction to Cognitive Grammar, *Cognitive Science*, 10, 1-40.
- Lee, D. (2001) *Cognitive Linguistics Introduction*, New York, Oxford
- Kellerman, E. (1979) Transfer and non-transfer: Where we are now, *Studies in Second Language Acquisition*, 2, 37-59.
- Takahashi, T. & Tanaka, S. (1992) Mental Representation of Verbs in a Second Language TAKE, HOLD, and KEEP, *SFC Journal of Language and Communication*, 1, 105-121.
- Tanaka, S. & Abe, H. (1984) Conditions on Interlingual Semantic Transfer, *TESOL '84: A Brave New World for TESOL*, 101-120.

参考辞書

- 新村出編(2008)『広辞苑 第六版』岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000)『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 松村明監修(1995)『大辞泉 初版』小学館
- 松村明編(2006)『大辞林 第三版』三省堂

付記:

本発表は2011年春にアルクから出版予定である、森山新・今井新悟・荒川洋平(編)『日本語ネットワーク学習辞典』(仮)の編纂にあたり行った基礎研究である。